

平成二十五年八月十九日

人生半ばを遙か昔に過ぎ、時に己が來し方を振り返れば、この日頃氣にかかる思ひ出あり。我、幼き頃、恩を受けし人に對し、感謝の念を示さざるまま放置したることぞある。

小學一年になりて日淺き頃と覺ゆ。かねてより親にねだりをりたる上履きと上履袋やうやく手にして喜び、そを振り振り學校に向ふ時、嬉しさあまりて大いに振りたるその刹那、何の加減たるや手を放せり。

これ折悪しく橋の上。上履、欄干を超えて飛ぶ。下のその川、大河にはあらねど川幅五十メートル餘。この時、水深四、五メートルに及ぶべし。

うろたへて橋を引返し、堤防を驅下りて見れば我が上履、橋脚に纏附きたる水草塵芥の間に袋ごと留まるが見ゆ。我、錯亂し、いかでか回収はからむと靴脱ぎ水に向かふ。このとき、異常察知したる見物人既に多く、橋の上より我を見下ろして「あぶなし」「行くな。溺るるぞ」「あきらめろ」と叫びぬ。中に「上履はまた買つてもらへ」の聲あり。さ言ふは、我が親を知らざる者。不注意にて失せたるものを買ひ直すほど甘き親にあらねば「さに行かず」と大聲返すを記憶す。

この堤防、水面近くは角度急なるコンクリート。我その途中まで下りし時、初めて恐怖に取憑かれ先に進むことならず。さりとて急なる斜面、這上り引返すも能はず。進退極まり、ずり落つること避けむと四肢踏張りつつ泣き始む。

そのとき、救世主現る。對岸の菓子屋が主人、手漕舟を有しをれば、騒ぎを聞きて我がために舟を出す。、器用に漕ぎて橋脚に近づき、浮きつ沈みつする上履袋拾ひ上げ、舟をこちらに寄せ、我が這ひ蹲るところ近く、平らなる箇所に放り上げ給ふ。

勝手なるかな。舟來るを見、上履、我に戻るを確信せるそのときより、我が心配は學校の始業時間に遅るるに移れり。大人の手を借り斜面這上がるや否や、見物人が手にある濡れそぼちし上履ひつたくり、學校に向け一目散に驅出しぬ。舟、對岸に戻り給ふ。

始業の時間に間に合ひたるか、濡れたる上履をそのまま履きたるか、その後の顛末、記憶更に無し。いかなる騒動あれども上履戻れば一件落著。家に報告すべき大事とも思はざりき。明る春の終業式にて一年の皆勤無遅刻賞に與れる事實よりすれば、事件に拘らずこの日も遅刻せざりきと想像す。

假に、かの菓子屋が主人、舟を出し給はざらば如何か。我、或は制止を振切りて川に入り、大人の見物人數多ありと言へども、罷り間違はば重大なる結末に至れるやも知れず。然るに、我は彼の主人に禮の一つも言はざりき。親切に對する感謝の念を示す事を知らず。あらためて出向きて謝意を表する作法にも思ひ當らざりき。

ある日、母、然然のことを聞きたるが事實なりやと問ふことありて、初めて數日前の事件を

思出し、こと母の耳に届きたるを知る。或は母、菓子折りなど持ちて禮に出向きたるやも
知れず。然らば、當事者たる我を伴はざるは、母に何事か思ふところありぬべし。我、その
何たるやを知らず。

とまれ、我には彼の主人の親切を受け、自ら一言の禮だに言はざりし事に、今、悔残れり。
その年齢を思へば最早この世にあり給ふことなかるべし。これこそ我がし残せることのひとつな
れ。